



# Social Designer

## Contents

P1~2 <インタビュー>JEN 木山啓子さん——人々のつながりを基盤に、被災地の自立を支援する

P3 新任教授紹介／研究科だより

P4 キャンパスの声

P5 ゼミ紹介

P6~7 公開講演会レポート

P8 アベッド氏名誉博士学位授与関連記事／他

Vol.13

発行：立教大学大学院  
21世紀社会デザイン研究科  
編集責任：中村陽一  
編集長：高橋良成  
発行日：2009年7月15日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



日本初！  
〈社会組織〉〈非営利組織〉〈危機管理〉  
3つの分野を学べる大学院

## ●巻頭インタビュー● 人々のつながりを基盤に、被災地の自立を支援する

自立支援を目的に世界中の紛争地、被災地で活動するNGO JEN。「自立を支援する」とはどのようなことなのかを理事・事務局長の木山啓子さんにうかがいました。そのお話には、国際協力の基本的な姿勢、被災時にコミュニティのあり方が重要な鍵を握ることなどが示唆されており、21世紀社会を生きる私たちへのヒントにあふれています。

### ■ まず、JENの設立経緯、活動の内容や目的を教えてください

1994年、紛争中だった旧ユーゴスラビアへの支援を目的に、6つのNGOが連合して活動を行ったのがJENの始まりです。その後も、紛争や災害の起きた地域での自立支援を行ってきました。

紛争や災害の傷跡は長く残ります。私たちも被災地への緊急支援から始まり、人々が自立できるまで長期にわたって支援しているものが多くあります。支援にあたっては、紛争や災害の性格とそれが起こった地域の特徴を考慮して、必要とされる「道具」を提供します。これは、物資の配布、井戸堀り、学校の再建といったすべての活動を、その地域の人々が主体的に考え、行動するための「道具」として提供することに徹するという意味です。

### ■ 自立を支えるための活動とはどのようなものなのでしょうか？

JENが目指しているのは、世界中の一人ひとりが幸せに暮らせるようになること。自立を支えることでそれを実現しようとしているのです。

パキスタンでの活動を例にお話ししましょう。2005年にカシミール地方で地震があったので、緊急から復興に至る支援をしました。

支援は誰もが行きやすい地域に集中しがちなので、JENはバーグ県という被害が大きく、アクセスの悪い地域を選んで復興に至る緊急支援をすることにしました。

たとえば、400世帯住んでいる村でテントを200張配布する場合、全世帯には行き渡らないので、あえて村人を集め、最も必要とする200世帯を選んでもらいます。そうすると村人たちは話し合いますよね。その過程で、リーダーがリーダーシップを発揮したり、リーダー不在であれば、話し合いを通して適任者が現れるようなことが起こります。テントを受け取ることをきっかけに、現地の人々が自ら考え、公平な目で受け取る人を選び出す機会をつくることで、再びコミュニティが機能しはじめます。こうして人々の自立へとつながっていくよう働きかける



木山啓子さん。設立当時から参加し、2000年からは事務局長を務めている



パキスタン・バーグ県にて。テントの配布先を話し合っている人々の様子  
(写真提供・JEN)

のがJENの支援です。この場合、「テントを配布するプロジェクト」が「道具」なのです。

同じパキスタンの例ですが、現地の子どもたちは、自分がいい子にしていなかったから神様が怒って災害を起こしたのだと落ち込んでいました。そこで、地震のメカニズムや防災に関する教育と心のケアを行い、災害は罰ではないということを理解してもらうことにしました。

その際、私たちが子どもたちに直接話すのではなく、現地の先生方に教え方を身につけてもらい、先生から子どもたちに伝えてもらうよう働きかけました。また、先生方が互いにトレーニングするようなプログラムも考えてもらいました。大人から子どもに伝え、同時に、大人同士でも理解を深め工夫してもらうようにしたのです。

JENの方針に、「最小限の費用で」というのがあります。現地の人たちの自立のためには1円も無駄にしないのは当然ですが、一石二鳥ではなく、一石五鳥を目指して効率を高めるよういつも工夫しています。

### ■ 支援を終える時というのは、どのように決まるのでしょうか？

現地での活動を始める前には、支援の内容や期間の目安を決めるので、その条件が満たされれば事業を終えて引き上げます。たいていはスケジュール通りにいかないので、現地のペースに合わせて本当に自立できそうであることを確かめるまで支援を続けることが多いです。

撤退が決まると、もっといてほしいと言われることがしばしばです。冷たいと言われても、心を鬼にして去ることで、依存を招かないことが大切です。「あなた方が去った時は冷たいと思ったけど、その後、自分たちで頑張った結果、今はこれほどうまくいっています」という誇りに満ちた便りをいただくことがあります。自立を支えるというのは日々楽しいわけではありませんが、辛さが喜びに変わる瞬間です。

### ■ 日本では新潟で活動されていますが、どのような支援をしているのでしょうか？

新潟は2004年に新潟中越大地震が起きたことでかわるようになりました。日本には人も物も十分にあるので、当初は支援を考えていなかったのですが、問い合わせしてみるとJENが培ってきた調整の能力が役立ちそうとわ

かったので支援することを決めました。

私たちが入った中山間地は、もともとの過疎に加え、地震後にも人々が離れ、集落はまさに存続の危機に瀕していました。高齢の方が多いこともあり、いずれ集落がなくなってしまうことを避けられない事実として受け入れているようでした。日本は恵まれているようですが、持続可能な自立という点で考えると、支援が必要な地域があるのです。新潟での活動は今も続いていて、全国からのボランティアや様々な団体・機関と連携することで、村おこしのモデルの一つになりつつあります。

被災地で活動をしていると、もともとのコミュニティの結びつきが、いかに被害を小さくするかということを実感します。自立した一人ひとりが利益目的でなく結びついているコミュニティは、災害の際にも大きな力を発揮します。コミュニティができているということそのものが、何よりの防災活動といえるかもしれません。

### ■ 最後に、国際協力や災害支援に関心をもつ方々に向けてメッセージをお願いします

皆さんには、今日からできる国際協力として次のどれか一つでいいので、実践していただければと思います。①知る、②行動する、③続ける、④忘れない、⑤伝える、の5つです。

旧ユーゴの難民キャンプに行った時、コンテナを改造した部屋に招かれ、砂糖がたっぷり入ったコーヒーを出していただきました。貴重なものだから申し訳ないと丁寧に辞退したら、「あなたが飲んでくれるととてもうれしい。配給を待つばかりのキャンプで誰かに何かをしてあげられることが喜びなんです」と言われました。

現場で、極限的に厳しい状況にある人々にたくさん出会い、人は自分のためには頑張れないけれど他者のためには頑張れるということに気づきました。絶望のなかにある彼らに、世界には希望がもてるということを教えてもらったのです。人の役に立ってうれしいという気持ちは人間のDNAに組み込まれているのだと今は確信しています。一人ひとりのなかにある、誰かの役に立ちたいという気持ちに従うことが国際協力の始まりだと思います。

### ■ 特定非営利活動法人JEN(ジェン)

1994年、旧ユーゴスラビア地域での緊急支援のため、日本初の連合NGO「日本緊急救援NGOグループ(Japan Emergency NGOs)」が設立されたことに端を発する。以来、「心のケアと自立の支援」をモットーに、世界各地で戦争・紛争や自然災害に遭った人々を支援している。2000年にはNPO法人格を取得し、現在の団体名に改称。2005年、認定特定非営利活動法人(認定NPO)の認定を取得。事業の運営にあたっては、現地のニーズを見極め、現地の人々とともに、とり残されがちな人や地域を中心に、自立とその存続を、最小限の費用で達成することを方針としている。

URL <http://www.jen-npo.org/>

## 新任教授紹介

この4月より、21世紀社会デザイン研究科では、新たに3人の先生方をお迎えしました。研究科の学際性にさらなる彩りを添えてくださるであろう先生方にメッセージをいただきました。

### 赤井田 健造 先生

武蔵工業大学卒業後、セコム株式会社入社。システム開発、技術業務統括、電子化マニュアル整備、企業内研修ほか、各部門を歴任し現在に至る。

35年余の企業生活を経て、この4月から立教大学教員の一人に加えていただきました。企業活動では、セキュリティの領域で常に先進性を追求してきたという確信がありましたが、これはあくまでもクローズされた世界のことです。大学院で学ぶ学生諸氏は、それぞれの分野で社会活動している方々が多く、またその裾野も広い。長年一企業で活動してきた私と

しては、従来意識したことがない知識環境に、今立っていることを実感しています。私は、知識とは必ず行動を伴うもの、あるいは行動に帰結するものだと考えてきました。限られた履修期間を自身の行動力を強化するために集中してほしいと思います。



### 長 有紀枝 先生

認定NPO法人難民を助ける会理事長、認定NPO法人ジャパン・プラットフォーム共同代表理事。専門は平和構築、人間の安全保障、ジェノサイド研究、国際人道法など。著書に『スレプレニツァーあるジェノサイドをめぐる考察』（東信堂、2009年）ほか。

皆さんこんにちは。長有紀枝です。現在、難民を助ける会とジャパン・プラットフォームという2つのNGOの代表を兼務しています。前者は1979年に難民支援のために設立されたNGO、後者は30を超える日本のNGO、外務省、経団連など多様なステークホルダーからなる国際人道支援のための組織です。難民支援の現場では、時に人を助けるどころか、まる

で切り捨てているような思いにかられることが多々あります。だからこそ、教育者・研究者としては皆さんとともに、過去の過ちを繰り返さない、様々な紛争やジェノサイドの犠牲者の数えきれない死を無駄にしない仕事をしていきたいと思っています。



### 齋藤 哲男 先生

社団法人日本在外企業協会業務部長（日立製作所より出向）、放送大学講師、日立オーストラリア社長、国際渉外部長、ロスアンゼルス・コーポレート事務所長などを経て現職。経団連国際労働委員会政策部会委員、日本規格協会リスクマネジメント規格国内委員も務める。

グローバル化の進展とともに、これまでの国民国家の枠を超えた経済の相互依存がますます高まるなか、環境問題をはじめとして、極度の貧困や飢餓、疾病の蔓延など、いわゆるグローバルイシューが増大しています。それに伴い、企業が自らの経済活動のみならず、地域やグローバル社会において果たすべき役割が拡大しつつあります。一方、企業にとっての経営環境は日々激

しく変化し、そのリスクは巨大化かつ複雑化し、ビジネス自体の経済的リスクのみならず、社会的責任（CSR）をも問われるようになってきています。企業と社会との関係を考察することを通して、企業の広範な責任とリスクについて、ともに考えていきたいと思っています。



## 研究科だより

### 第2回 同窓会総会開催

去る5月23日、昨年発足した21世紀社会デザイン研究科同窓会の第2回総会が開催されました。今年3月には1期から6期の修了生へ勧誘を行い、多くの入会者を迎えました。今年度は、ホームページの開設や恩師の先生方を交えた交流会が予定されています。同窓会の活発な活動を通じて、研究科の財産であるネットワークがさらに発展することが期待されます。

### 21世紀社会デザイン学会2009年度総会開催

同窓会総会と同じく5月23日、21世紀社会デザイン学会の総会が開催され、2008年度の総括、報告、および2009年度の運営について議論が交わされました。発足から4年目を迎えた今年、学会の会員数は325名にまで増加しており、研究科内外を問わず関心の高さを物語っています。第4回の年次大会は12月5日（土）・6日（日）に開催されます。皆様のご参加をお待ちしています。

## =7期= たかだ かつひろ 高田勝浩さん

中曽根弘文議員（現・外務大臣）秘書として政治を学び、2003年の統一地方選挙で群馬県太田市議に。現在2期目を務める。ライフワークは、財政問題で子どもたちにツケを残さないこと。



### 市民のためになる 公共政策の知を学ぶ

「方法論を体系化する必要性」は、今後の議員活動の質を高めるために極めて重要だと痛感していた矢先、21世紀社会デザイン研究科を知りました。

数ある大学院ですが、本研究科に入院した最大のメリットは、時代が求める公共政策に対し、「個人」と「社会組織」、そこに介在すべき「社会デザイン」を立体的にとらえ、視認能力を高めることを目的とする、本研究科の理念にほかなりません。政治は一手段であります。その前提には人間が介在し、また規則性を伴わないものです。だからこそ、経験と院での新たな知識習得の相互作用が働き、議員として社会に還元できるのではと考えています。

真実を知ろうとする考えは健全であると思います。その目的は公益に資する一助と考え、探究することを自らの拠りどころとすること。本研究科は、その欲求を十分に満たすことのできる知的資源です。

## =7期= やまもと かおり 山元香里さん

2005年、福島テレビにアナウンサーとして就職。2007年9月同社退職後、セントフォース所属のフリーアナウンサーに。現在、TBS「ひるおび」、テレビ東京「SG競艇ライブ」などに出演中。



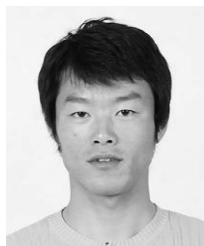
### 大学院で新たな視点 「テレビ局のCSR」を発見

2007年秋、フリーアナウンサーに転身した私は、それまでとはまったく違う、保障のない仕事のなかでフリーの厳しさを日々実感していました。今後の人生をどう描くか——今まで考えもしなかったことを初めて真剣に悩んだ時期でした。そんな時にすすめられたのが大学院への進学です。ちょうど父の介護のため、ホームヘルパーの資格を取得したこともあり、仕事以外の勉強をしたいと思っていた時でもありました。

入学して1年、刺激的な生活のなかでだいぶ気持ちも変わってきました。これまで私は、テレビは夢を売る商売だと思っていましたが、現実にかかる社会問題を解決するために、もっとできることがあるはずだと考えるようになりました。その想いが、「テレビ局のCSR」という研究テーマにつながってきていると思います。大学院で自分の軸となるような考えに出会えたことに感謝しています。

## =8期= きん ぶんけつ 金文杰さん

中国・吉林生まれ。2007年、中国山東大学を卒業し、同年10月に来日する。1年半にわたり、日本語学校で日本語を習得した後、本年4月、本研究科に入学。



### 実践的な日中関係 の架け橋を求めて

私は昔から政治上の国際関係に関心が深く、日本への留学を決めてからも、当初は日中両国関係に関わる研究をしようと思っていました。しかし、様々なシンポジウムや講演会に足を運んだことで、21世紀はもはや、国境を超えた様々な課題が取り上げられる時代だと遅まきながら知り、日中両国友好関係維持についても、ストレートな政治的プロセス以外に、経済協力など柔軟かつ実践性の高いプロセスがたくさんあるのではないかなと思うようになりました。大学院では、中国ではまだ認知されていないCSR分野について学ぼうとしています。

入学してからおよそ2か月。年輩の同級生とのコミュニケーションをはじめ、不安なことも多々ありますが、多様なバックグラウンドの持ち主でもある皆との勉強は、毎日が刺激的で学ぶことばかり。今まで経験してきた「学校」とは一変したキャンパスライフを満喫しています。

## =8期= ひらかわ こ 平川すみ子さん

イトキンを経て、自ら企画会社を設立。海外ネットワークを活かした情報分析をベースに、アパレルメーカー等への企画提案に関わる。現在、東京モード学園等で後進指導にあたる。



### ファッションを通じて 時代に伝えるものとは

三宅一生のデザインに触発され、別の業界からファッションビジネスに転身しました。衣類は、国境を超え、社会を反映して時代とともに変化していく——その変化を自分の手で創り出しながら生きたいと思ったのです。

数年前から、自らの経験を後進に伝え、未来を託す仕事を集大成しようと思っていましたが、昨年来のファストファッションの流行に衝撃を受けました。持続可能な社会を目指す流れに逆行する、大量生産・大量消費・大量廃棄のシステムが、成功モデルとして表層的に日本企業によって追随されています。次代に引き継ぐものがこのままでいいのか？経済学ではなく、社会学的視点からこの問題を解決できるのではないかな？

研究科では、テーマを掘り下げるだけでなく、触発し導くこと、思考し学ぶことの本当のかたちの体験と確認、そして多様な方々との交流が大きな収穫になりそうです。

# ゼミ紹介

21世紀社会デザイン研究科では、今年度14のゼミを開講しています。個性豊かな14のゼミの様子をご紹介します。

## 赤井田健造ゼミ

【危機管理学分野】

赤井田ゼミでは危機管理の範疇に入る研究テーマを中心に研究を行っています。社会デザインに関わる研究テーマは危機管理と接点を持つことも多いため、学生への門戸は分野を限定せず、広く開かれています。学生個々の問題意識と自主性を尊重し、個人が設定した研究目的に向け、共に考え、行動するグループです。ゼミは主に個人または少人数の面談形式で行われます。研究経過を確認し、同時に研究内容や方向性を協議しつつ修正を加え、成果を積み上げながら進められます。

## 五十嵐暁郎ゼミ

【社会組織理論分野】

毎日様々な社会現象が起きています。とかく表面に現れていることや個別の事象に心を奪われ、本質を見失いがちです。これではますます社会を混迷の淵に追いやるばかりです。五十嵐ゼミでは、現象の背後にあるものへの無限なる接近を試み、本質は何か、なぜその現象が生まれるのかを透徹した眼で見つめる力を養います。全員が同じテキストを読み、読後感を共有し、発表・討議します。皆で読み解くことで、一人では難解で敬遠してしまうテキストを読破できることもゼミの魅力です。

## 伊藤道雄ゼミ

【コミュニティデザイン学分野】

「21世紀における国際協力NGOの活動」はどうあるべきか。伊藤先生が熱く語り出すと、もう止まりません。私たちも先生の言葉に圧倒され、吸い込まれるように聞き入ってしまいます。ゼミ生の研究分野は、NGO論、国際協力論、平和構築と多彩です。「Why do you think so?」で議論が繰り広げられる2時間余りのゼミが終わる頃には皆フラフラになっていますが、同時に快さが生まれます。ジェットコースターに乗っているような……スリル&爽快感満点のゼミです。

## 長 有紀枝ゼミ

【危機管理学分野】

いつも穏やかな微笑みを絶やすことのない長先生ですが、本当の姿は国際的な難民救済活動という厳しい現場で長年活動されてきた行動派であり、研究的な視点から国際援助を見つめる学究の徒でもあります。現在も2つのNGOの代表を兼務しながら本研究科教授をお務めています。今年が初年度のゼミということもあり少人数ですが、ゼミ生は年齢も幅広く個性豊かなメンバーがそろいました。レンガ造りの趣きある部屋で開かれるゼミでは、世代を超えた様々な意見が飛び交っています。

## 笠原清志ゼミ

【社会組織理論分野】

組織論イコール人間論であると、穏やかに、かつ力強く語られる笠原先生。ゼミでは組織論を軸に、21世紀の公共性のあり方などについて、詳細かつ緻密な分析に基づいて教授してくれます。それはまさに「今」と「これから」を生きる私たちに、多くの方向性と可能性を感じさせてくれます。また、学生一人ひとりのペースを的確にとらえ、鋭い視点で適切な助言をいただけるのも笠原ゼミの魅力です。組織、人間、そして21世紀社会について、ゼミ生は大いに考え、学びを深めています。

## マーク・カプリオゼミ

【危機管理学分野】

カプリオゼミでは、朝鮮半島に関する歴史学、国際関係、平和学といった様々な問題をテーマに研究しています。多面的な視点での議論が必要になるため、ゼミ生は多種多様なバックグラウンドを持つ者が集まっています。実際に、先生も含めて外国籍の比率が高く、ドーナツと先生のオリジナルコーヒーをいただきながら始まるゼミでは、異文化的な雰囲気が味わえるのも魅力のひとつです。個性豊かなメンバーの間で、歴史的な問題から社会問題まで活発な議論が交わされています。

## 川村仁弘ゼミ

【危機管理学分野】

川村先生は危機管理学のなかでも行政に関する分野を専門としています。ゼミでは、基礎的なことから論文執筆に必要なことを丁寧に指導していただきます。ゼミ生のテーマは実に様々ですが、先生自身がとても勉強熱心であり、どんなテーマにも柔軟に対応していただきます。難解なことなども例えを交え、わかりやすく説明していただきますし、先生の経験や知識も踏まえて一人ひとりに的確なアドバイスをいただけるため、論文執筆に迷っているときに新たな視点を得ることができます。

## 北山晴一ゼミ

【社会組織理論分野】

北山ゼミのキーワードは「異」。ゼミ生は皆、先生のご指導のもと、アイデンティティ、ファッション、教育、CSR、情報など、様々なテーマで研究に取り組んでいます。ゼミでは一人ひとりの研究テーマをメンバー全員で「指導」します。この指導で寄せられる、異なる興味・経験を持つメンバーからの意見や指摘は刺激的で、ゼミが終わっても議論し足りない人が続出します。活発な意見交換、刺激、多様性を求める者にとって北山ゼミは「最向」のゼミといえます。

## 齋藤哲男ゼミ

【危機管理学分野】

社会人経験ゼロの留学生も、現役の企業人も一つになってCSRをはじめ、企業経営上の様々な分野を横断し、熱気あふれる議論が行われるところが齋藤ゼミの一番の魅力。欧米諸国を回りつつCSR事業に身を置いてきた先生ならではの豊かな経験がアドバイスの「秘密兵器」です。「現場派」のはずの先生から、厳しくかつきめ細かな指導をいただいていると、「先生はいったい何派?」とその知識の豊富さに驚くとともに心強くなります。また、異国でのエピソードも興味深いものばかりです。

## 高橋紘士ゼミ

【社会組織理論分野】

保健・医療・福祉といった研究テーマを持つ院生が中心の高橋ゼミですが、近年は多彩な広がりを持ってきました。テレビメディア、建築、インターネットとテーマは拡散していますが、「人がよりよく生きられる社会の実現のために」というポジティブな想いが基調にあります。縦横無尽に飛び散る発想と、柔和な眼鏡の奥で時折キラリと光る高橋先生の厳しい指導の海原を全員Free Mind & Free Styleで泳ぎこなしながら修士論文の執筆に立ち向かっています。

## 中村陽一ゼミ

【コミュニティデザイン学分野】

NPO/NGOをはじめ、市民参加と関わる幅広い領域をカバーする中村ゼミ。ゼミ生の研究テーマも、NPO、CSR、ソーシャルビジネス、コミュニティの活性化、協働など、21世紀社会デザインに欠かせない様々なキーワードが並びます。現場の空気を反映したタイムリーかつ適切な指導は、社会変革の流れの中心で活躍している中村先生ならではの。そして何より、修了生を含めた130名以上のネットワークも大きな魅力。個性的なゼミ生同士のつながりは、きっと一生の財産になるはずです。

## 野中章弘ゼミ

【コミュニティデザイン学分野】

野中ゼミには、NGO、メディアリテラシー、チベット、人間の安全保障、戦争の記憶、高齢者の就業など、様々なテーマを研究する学生が集まっています。ゼミでは個々のテーマに応じて皆で徹底的に議論します。現実起こっている事象をいかに論理的にとらえ、論理的に説明できるか。これを軸に、適宜映像などを使い議論を広げていきます。野中先生は自ら学び、求めれば必ず力になってくれる情熱的な先生です。「考える」という厳しくも、やりがいのある作業ができます。

## 萩原なつ子ゼミ

【コミュニティデザイン学分野】

環境、ジェンダー、ワーク・ライフ・バランスなど、多様な分野を研究されている萩原先生ですが、ここに集う学生たちの研究テーマもまた多種多様です。先生の専門分野にこだわることなく1対1で修士論文作成の個別指導をさせていただけるのが萩原ゼミの魅力です。現役メンバーは修士1・2年次生だけで20名を超え、これに博士後期課程の学生も加わった強力なキャリア集団といえます。全員が集まれば、萩原先生のとても明るい性格と相まって、知的で賑やかな議論が行われています。

## 渡辺 元ゼミ

【コミュニティデザイン学分野】

渡辺ゼミの主な研究領域は、市民社会論、NPOなどコミュニティデザイン学ですが、ゼミには様々な研究テーマの学生が集まっています。その個性豊かな面々をまとめ上げているのがBOSSの渡辺先生。人情味あふれる渡辺先生率いる非常に活気のあるゼミです。ゼミのウリはきめ細やかな指導。毎回のゼミでは、先生から鋭く的確なアドバイスをいただけます。先生は一人ひとりに親身に接して下さるのでとても心強く、また、グループ指導のためゼミ生からも貴重な意見がもらえます。

# 公開講演会レポート

21世紀社会デザイン研究科では多種多様な講演会・イベントを催しています。ここでは5・6月に開催された4つの講演会の様子をご紹介します。

●2009年5月23日開催

## ●ソーシャルビジネスと21世紀社会デザイン

—社会的課題を解決する新しい試み—



横石氏

熊野氏

山崎氏

中村氏

石川氏

貧困、環境問題、農村の過疎高齢化といった様々な社会的課題を、ビジネスの手法を通して解決していく「ソーシャルビジネス（SB）」が注目されるなか、本会はこれまでの公開講演会のなかでも最多の400名近い参加者を得て大盛況となりました。まず中村氏が、経済産業省とのパートナーシップで推進されているSBの現状と社会へのインパクトを紹介。続いて3人のパネリストから、起業のきっかけとなった想い、ユニークな事業のしくみ、試行錯誤から得た手応えなどが熱く語られました。

熊野氏の「(社会における)関係性の欠如に対して関係

性を提供する。幸せが感動の共感であるならば、感動を創る」という言葉、山崎氏の「(製品の背景にある)ストーリーとデザインによって世界ブランドを創る」、横石氏の「(高齢者の)出番をつくると一人ひとりが元気になり、まちが元気になる。必要とされているのはリーダーではなくプロデューサー」といった言葉が印象的でした。

「起業のきっかけは社会的問題を解決するという漠然とした目的というより、特定の問題に関する強い怒りや想いではないか」という石川氏の発言が、パネリスト諸氏、ならびに会場の強い共感を呼んでいました。〈S〉

### ◆パネリスト

横石 知二 株式会社いどり代表取締役副社長

熊野 英介 アミタ株式会社代表取締役社長

山崎 大祐 株式会社マザーハウス取締役副社長

中村 陽一 本研究科教授/ソーシャルビジネス推進イニシアティブ座長

### ◆コーディネーター

石川 治江 本研究科客員教授/21世紀社会デザイン研究学会副会長/NPO法人ケア・センターやわらぎ代表理事

●2009年5月30日開催

## ●地域開発のための新たな資金循環の仕組み

—社会変革型NPO・米国タイズ財団の挑戦—



バイク氏

岡部氏

黒田氏

渡辺氏

今や政府・企業と肩を並べる重要なアクターとなったNPO。その運営面での重要課題である資金集めに、多くの市民を巻き込むことで社会変革を推進しているタイズ財団のCEO、バイク氏を招いての講演会が催されました。

前半はタイズ財団の事業が紹介され、社会的企業として個人・企業等のドナーから広く小規模の資金を集め、それらを社会変革に取り組むNPOに投資する中間支援的役割を担っていること、また、時にはドナーを支援先NPOの活動現場へ連れて行き、資金提供への意欲をさらに引き出すという、その独自性と成果が語られました。

### ◆パネリスト

ドラモンド・バイク タイズ財団CEO

岡部 一明 愛知東邦大学教授

黒田かをり CSOネットワーク共同事業責任者

### ◆コーディネーター

渡辺 元 本研究科教授/トヨタ財団プログラム・ディレクター

米国のNPOに詳しい岡部氏、黒田氏を交えた後半のセッションでは、「社会貢献活動に関わりたいが何から始めたらよいか」という会場からの質問に対し、バイク氏からは、ナイキの広告コピーを例に“Just Do It”という熱いメッセージをいただきました。

最初の一步が踏み出せないという内なる熱き想いを抱えた人々にとって、本講演でのバイク氏のメッセージやタイズ財団のような社会的企業の存在は、大きな刺激と励みになったものと思われます。日本におけるNPOの発展に向け、貴重な示唆にあふれた3時間でした。〈T〉



●2009年6月6日開催

●やねだん学事始

—21世紀のコミュニティデザインの理想を求めて—



- ◆パネリスト  
 豊重 哲郎 鹿児島県鹿屋市柳谷自治公民館館長  
 山縣由美子 南日本放送キャスター・ディレクター  
 佐野 真一 ノンフィクション作家  
 椎川 忍 総務省地域力創造担当審議官
- ◆コーディネーター  
 高橋 紘士 本研究科教授

「人口300人、ボーナスの出る集落」として多くのマスコミで話題になっている鹿児島県鹿屋市の柳谷集落（通称やねだん）には行政に頼らない地域再生、人口減少の歯止め、大胆なリーダーシップと住民の協働など新たな市民社会づくりに役立つ様々なヒントが隠されています。それらを学問として見直すきっかけにしたいというのが本講演会のねらいです。

“やねだん発見”のきっかけとなった南日本放送制作のドキュメンタリーの上に続き、今年1月の国会代表質問で麻生総理に「総理、やねだんに来ませんか」と呼び

かけた尾辻秀久元厚生労働大臣が特別参加し、スピーチをしていただきました。

後半のセッションでは4人のパネリストから多彩な意見が出ましたが、「今の日本がなくなってしまった希望、参加、感動が満ちあふれている」（佐野氏）、「日本人の心を持っている誰もがこれを見たときに涙が出てくる」（椎川氏）など個々の想いが伝わる率直な言葉が印象的でした。何よりも「財源は人。地域に補欠はいない。全員レギュラー」と涙ながらに語る豊重氏の人としてのエネルギーに誰もが勇気づけられた感動的な講演会でした。〈N〉

●2009年6月25日開催

●海外からの視点～いまニッポンのナショナリズムを問う

—中国、米国人ドキュメンタリー映画監督たちは語る—



- ◆講師兼パネリスト  
 班忠義 作家／映画監督  
 ジャン・ユンカーマン 映画監督  
 李 纓 映画監督
- ◆コメンテーター  
 マーク・カプリオ 本研究科教授
- ◆司会  
 野中 章弘 本研究科教授／アジアプレス・インターナショナル代表

経済不況下で日本人の関心は内向きとなり、外に開かれた意識を自ら閉じつつあります。偏狭なナショナリズムの台頭すら予感させる昨今の日本を、外から照射したらどう見えるのか。本講演会では、日本軍「慰安婦」、「日本国憲法」、「靖国神社」などをテーマとしたドキュメンタリー制作を通じ、日本のナショナリズムを形成する思想的土壌を掘り下げてきた外国人映画監督の方々をお招きし、現在の日本の思想状況の検証を試みました。

まず第1部では、3人のパネリストがどのような問題意識のもとで映画を製作してきたのかを、映像を交え、

野中氏と対談。来日して感じた戦後処理についての不条理さや、日本人には「アジアの中の日本」という意識が欠如しているのではないかといった指摘がありました。

第2部のディスカッションでは、主に日本の歴史認識、戦争責任について熱い議論が交わされました。日本が国家として、また日本人として、それらを今まで怠ってきたこと、また、事実を積み重ねていくことで本質を見つめ、今一度歴史や戦争を再考することの重要性などが語られました。開かれた日本人として生きることへの示唆に満ちた密度の濃い講演会となりました。〈T〉



## 世界最大級のNGO BRACを率いるソーシャルアントレプレナー ファズレ・ハサン・アベッド氏に 本学名誉博士学位を授与

1月20日、ファズレ・ハサン・アベッド氏への本学名誉博士学位授与式ならびに講演会が行われました。

講演でアベッド氏はBRACの設立経緯について、独立後の国家が機能しないバングラデシュにおいて一般化していた貧困に自分たちの手で取り組むことが必要だと気づいたと述べ、さらに、①マイクロファイナンスと職業訓練や技術提供、製品の流通の支援を組み合わせた活動、②教育の場として、農村にノンフォーマルな施設を立ち上げる活動、③村ごとにヘルスワーカーを育て、感染症予防や家族計画指導に取り組む活動、といったBRACの主要な活動プログラムについて紹介されました。

さらに、アベッド氏は同様のプログラムを海外でも積極的に展開している点を強調し、栄養失調、教育格差、エイズ、環境問題、テロなどの課題について、世界中が共通の問題として考え、協働する必要があると述べました。

BRACでは貧困を全体論的にとらえ、貧困層の人たちに収入と就職の機会を与えるとともに、彼らが組織化して意識改革がなされ、自ら貧困から抜け出す力を与えることが必要だと考えています。また、意識改革だけで変革を促すのではなく、着実な一歩が踏み出せるように、経済的なエンパワメントも重視しています。これらの活動を通じて、社会全体へ変化を促していくことが大切だということでしょう。

講演後には記者会見も行われました。バングラデシュからの留学生等が増えていないという印象をもつ本紙記者より、「ブラック大学あるいはバングラデシュの大学生が日本に留学するうえでの魅力や期待していることを教えてほしい」という質問に対し、アベッド氏は日本の保健・医療関係の研究の質の高さをあげ、疾病対策、保健、薬学といった分野での研究に関心をもつ留学生が増えていくのではないかと回答をいただきました。〈I〉

### 貧困層支援のためのBRACの経営哲学と実践

#### ◆パネリスト

ファズレ・ハサン・アベッド BRAC総裁

田中弥生 大学評価・学位授与機構准教授

下澤 嶽 国際協力NGOセンター事務局長/ジユマ・ネット代表

#### ◆コーディネーター

伊藤道雄 本研究科教授

アベッド氏への名誉博士号授与を受け、授与式翌日、対話フォーラム「貧困層支援のためのBRACの経営哲学と実践」が開催されました。

識字教育、農作業指導、公衆衛生、反差別教育、無金利融資といった活動を通して、食糧生産、平均寿命、就学率等の向上のため働いてきたBRACの活動の意義を改めて確認するとともに、アベッド氏の貧困層支援への熱い想いを会場中が実感しました。「重要なことは問題を解決できるリーダーを育成することであり、大学でも企業でもリーダーを育成できる組織は何世紀にもわたり繁栄する」とのアベッド氏の言葉が印象的でした。

国連機関、NGO関係者をはじめ、本学の大橋総長、教職員、学生ら多数が参集し、関心の高さをうかがわせる盛大なフォーラムとなりました。〈T〉

#### ファズレ・ハサン・アベッド

1936年バングラデシュ生まれ。BRAC (Bangladesh Rural Advancement Committee) 創始者であり総裁を務める。BRACは1973年に設立された世界最大のNGOの一つ。年間600億円の事業規模を誇り、教育支援機関として大学なども有する。人々が自らの意志で参加することが最も重要であるという理念のもと、貧困解消に向けて多面的に活動している。

## 立教グラミン・クリエイティブラボが誕生

3月に、バングラデシュのグラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏(写真)を迎えての調印式が行われ、立教グラミン・クリエイティブラボ (GRCL) が誕生しました。

GRCLは、社会的企業として高い評価を得ているグラミン銀行とのネットワークのもと、国際的産学連携によってソーシャルビジネスに関する協議やビジネスモデル構築をねらうシンクタンク&インキュベーター組織です。グラミン銀行は、ベルリン自由大学(ドイツ)、AIT(タイ)、グラスゴウ・カレドニア大学(スコットランド)などとも同様の取り組みを行っていますが、日本では本学が初となります。

日本の新たな活力源として、また、日本の経験知を他国と結びつける機構として、すでに数企業との協議が進みつつあり、今後の飛躍が期待されます。



### 編集後記

8年目を迎えた本研究科。今号では多彩な教員・学生が集う様子、また国内外を問わず広がるネットワークの一端をお伝えできたように思います。取材等を通じてご協力いただいた皆様に深謝申し上げます。

#### 編集スタッフ

石坂龍史、小林真弓、斎藤紘一、斉藤ひろ子、斉藤利恵子、佐野敦子、高橋良成、高藤洋子、藤井聡子、松沢佳苗、相木暢子、安達元彦、勝田祥子、木田優子、金文杰、倉形美樹、黄馨儀、小林由紀男、杉原学、高野智恵、高橋薫、中西豪士、韓賢淑、馬越弥生